吾妻鏡考證

リ 5
2658

明治四十年九月十八日
高田早苗氏寄贈

門 リ伊5
2658
卷

吾妻鏡考證

宮内省圖書寮

○吾妻鏡ハ何人ノ記セルニヤ未審、鎌倉ノ記録ニテハ幕府創業ノ事實ヲ知ルベキノミ、此書ニマサレルハ元ヽ實ニ武家ノ日本紀トモイフベキ至寶也、但廿六ヨリ廿九迄四巻ハ体裁同カラヽ子ハ早ヽ他書ノ説ヲ取テ補ヒタルモノニヤアラン、又脱漏一巻アリ、廿六巻ノ次、廿七巻ノ前、元仁二ヨリ、安貞元迄ヲ記シタリ、四十五巻欠本也、天正十六年黒田如水、小田原ノ北條氏政

ヨリ得テ後ニ
神祖ニ奉ル。
神祖コレヲ称美シ玉フ。浅カラズ。慶長十年ニ
至テ、鹿苑院ノ長老承兌ニ命ジ、活字板本ニ
ドリナサシメ玉ヘル由、承兌ガ跋ニ見エ然テ寛永三
年ニ、上師聊ドコレニ旁訓ヲ點ジテ刊刻セシム。林
道春ノ跋ニ記シタリ。此今ノ流布本也。
○東鑑假名本アリ。中野等和ガ。

台命ヲ奉リテ書名也。和歌續塵集ニ東鑑
ト云フ。ヲ改テ奉ルヲ云フ。
大樹ヲ仰ウケタマハリテ、萬治年中ヨリ
寛文五ノ年ニ至ル書終テ、奉ルヲ仰ト
傳ヘ給ヒ、久ル人ヨリ傳ノ云ル。
うつのくにの
めうとみつくきこの比、
○東鑑纂一类アリ。嶋津家所藏ノ吾妻鏡ヲ板

板本ニ校合シテ、板本ハ十六、十七、廿、廿五、廿七、卅一、卅二、卅三、卅四、卅七、四十、四十一、四十六ノ十三条ニ脱シタル文ヲ纂タル書也、此北條本ニ異ナル一本也、

○東鑑モト六十巻アリケンヲ、旅宿問答ニ見エ、義堂ノ日用工夫集、大田道灌随筆等ニ、吾妻鏡ヲ見エタリ、又清人朱彝尊ガ曝書亭文集ニ吾妻鏡ノ跋アリ、又昭代叢書ニ収タル尤侗ガ外國竹枝詞ニモ、空傳歴代吾妻鏡ノ句アリ、

四月小

九日　辛卯　入道源三位頼政卿、可討滅平相國禅門清盛由、日比有用意事、然而以私計略、太依難遂宿意、今日入夜相具子息伊豆守仲綱等、潜參于一院第二宮之三條高倉御所、催前右兵衛佐頼朝以下源氏等、誅彼氏族、可令執天下給之由、申行之、仍仰散位宗信、被下令旨、而陸奥十郎義盛、延尉為義

末子折節在京之間帶此令旨向東國先相觸
前兵衛佐之後可傳其外源氏等之趣所被
仰含也義盛補八條院藏人名字改行家

○一院　今按後白河法皇也　名目抄諸
公事言説篇ゟ一院院數ヶ所御之時
第一ノ院ヲ申也云云

○第二宮　今按高倉宮と称ス○紹運
録ゟ諱以仁母従三位成子季成卿女
治承四年五月廿二日中流矢薨光明山
前云云

○氏族　今按氏族ハ同事ゟ宇知ゟ
訓ル○左傳隱公八年ゟ公問族於衆
仲衆仲對曰天子建德因生以賜姓胙
之土而命之氏諸侯以字為謚因以為
族官有世功則有官族邑亦如之公命
以字為展氏云云義ゟ姓者生也以此

為祖令之相生雖下及百世而此姓不改族者
属也与其子孫共相連属其傍支則属則各
立氏礼記大傳曰繫之以姓而弗別百世而
昏姻不通者周道然也是言子孫當共姓
也云云〻氏猶家也氏族一也所從言之
異耳釋例曰別而称之謂之氏合而言之則
曰族云云○氏族博考總論〻舜典曰別
生分類生類也別其姓氏分其族類云云史

記注曰天子賜姓命氏諸侯命族族者氏
之別名也姓者所以續繫百世使不相別
也氏者所以別子孫之所出故世本篇言
姓則在上言氏則在下也云云

○散位宗信

今按尊卑分脉十一巻藤
氏六末茂の流左衛門佐宗保の子〻宗
信あり〻女中納言亮仲實云云〻これ
散位と六位〻〻無官の者をいふ○有

職問答二巻ハ散位ト書事無官の人ハ
可書之従一位迄ハ我とて散位と書之
前官の大臣なども些なるべし唯無官
心也いまゝ爵ならせめ者をば散位とも
不可称之由申人有歟以外相違也只無
官の位なかるゝ心得べし其故ハ文章生
も六位なゝ無官の者也但他官なのも
む歟受領ハ轉ぶる歟其時實名ハ加て

散位なるべしと除目ハ被載之事普
通也以前被仰聞候畢此分候哉云云○
樋口秘記ハ散位某ト書モ未官位ニ進マ
ヌ人ノ書ヲ也又受領ヲアゲ前ノミナリ位
階バカリニテ居ル人ノ書ヲアリ是ハ又別ノ
ヲ也云云

○令旨　名目抄諸公事言説篇ハ令旨東
宮四宮女院等仰也又親王等之所令同

歟、先規可勘云云、○有職問答一巻より、令
旨事、親王院宮ハ家司などの公事を
一人して書出したる奉書ハ事也云
云、令旨の事、宮門跡などハ勿論ノ由ぞ、
其以下摂家清家の門跡より書出たる
令旨と云事ハあやまり也云云、答より女院
ノヲ令旨ト申候、誰ニテモ其所ノ家司ノ
書下候奉書則人稱令旨也云云、[令按]

一人して書出したる奉書ハ連署
なるべし也、○有職問答四巻より、
院のとハ院宣、后のとハ如何申候哉、答
より、令旨ト称歟云云、親王・元宮々のを
令旨と申候哉、答より勿論候云云、故實
拾要一巻より、令旨是東宮ノ仰ヲ云、親王
宮々同之云云、○文德實録一巻、嘉祥
三年三月乙巳の条より、公卿奏言、施事天

下猶称令旨在於視聽有所疑請稟天
旨改令代勅未之許焉云云令按文德天
皇いまゝ東宮雅院をおはしましゝ
悼ましまゝかゝ令旨と称したまふる也○
官位令義解に令謂教令也云云○公式
令に皇太子令旨式三后亦准此式令旨云
云年月日皇太子畫日奉令旨如右令到
奉行大夫姓名亮位姓名右受令人宜
送春宮坊春宮坊覆啟訖留畫日為案
更寫二通施行云云令按本注に三后亦准
此式とあるハ太皇大后皇太后皇后
三后也准三后なるおなじ○周書冏命に
發號施令罔有不臧云云○蔡邕獨斷に天
天子命令之別名に奉而行之名曰令云云
○五音集韻に令ハ正切法也告戒也云云
○廷尉為義　廷

尉ハ撿非違使佐の唐名也尉ハ必ず佐なり廷尉佐とよび尉をばたゞ廷尉とのみよぶべし判官といふこれ也諸官の判官ハ某判官とよぶべし撿非違尉ハたゞ判官とよぶこと也事也○有職問答一巻より廷尉号事撿非違使佐を申なりとも候べしされども撿非違使惣号を用候ハゝ被仰出候キ云云○同三巻より左衛門府の所に撿非違使判官五位尉也但廷尉不渡以前ハ六位申度て後ハ人ハ大夫判官と書ベキ我ハ左衛門少尉と書て叙爵ハ左衛門尉ハ成て後ハ五位ハたゞ云云我ハ散位と書ベキ他人ハ左衛門大夫と書て云云今校此段寫誤あるて不審○二判問答より廷尉以小路名可稱号事不可有子細哉同官数輩時輙為分

別其人称居所連綿歟所謂六角判官京極
判官七條判官赤松光範堀河姉小路高倉等如
此仍始可号事不可有巨難哉云云
○相觸　節用集安部に相觸アヒフレ云云【今】
【按】相觸合摺の通音にて打逢の義なる
續日本紀四巻和銅元年正月乙巳詔て
相于豆奈比奉云云詔詞解一巻注に相
を必しも互にせ彼と此との間の事
ふ添ていふ言也といふ○御門祭
祝詞に天能麻我都比登云神乃言武惡
事相麻自許利相口會賜事無久云
云【今按】道饗祭祝詞に此語あるて
相率相口會と書たれあむもこゝハ
俗にマジクナラといふる同ぐ人の心に合せ
てひし率ふの相口會ハ人の言に合て
ふよくいふよの也○續日本紀廿九巻

神護景雲三年五月丙申詔ヨ岐多太尓
久惡奴止母相結謀家良久 云云 今按万葉
集九巻詠水江浦島子歌ヨ海若神之
女尓解尓伊許藝趍相誂良比言成之
賀婆加吉結常代尓至とあれ加吉結
とよめる相結とあり語勢なりとば
相と加吉と通ふ事知るべし此上の句
ヨ相誂良比とふれたれば下句ヨ同語を
換て加吉結とふる也ここ加文ふ
打とこのよめるこのごとふとい
打とのごふ也打霧しハこの霧し也
かゝ曇ハ打ゝと也万葉集八
巻大伴家持鹿鳴歌ヨ山妣姑乃相響
左右云云同十巻詠鳥歌ヨ山彦乃答
響萬田云云源氏柏木ヨあれたのむ人
ごとに如ぎ〳〵ふ

云云、かどの相響は打
響也、あひきもの、むかい打頼むも也、それも
轉ぶて、敬ける詞もいとる源氏若菜
下、おもひ病あるたてたん、
まのあるを云云同東屋、よこよろ
くこんゆる五位四位とて、あひしもぞよ
づれさぶれて云云同手習、屋ども
相ぶれ云ぶんとて、まのうとよも。

なるとしる云云是等のかおうむる
おうこうかどいけて敬ける詞ゆて罷
成とも、相成とも、相構てとも、
さこおり。○觸、摺ゆて、不と須と横
通也、万葉集四巻大伴卿歌、神樹尓毛手
者觸云乎云云同八巻笠金村伊香山歌、
客行人毛、往觸者云云同十巻詠黄葉歌、
吾背兒我白細衣往觸者應染毛黄葉山

可聞、同类、問荅歌ニ、瀧都山川、於石觸云
云、同巻、詠雪ニ、妹之手本、伊行觸糠云云、同
十一巻、正述心緒歌ニ、玉桙之道去夫利尓不
思妹乎相見而云云、同类、寄物陳思歌ニ、
斂刀諸刃之於荷去觸而云云、同十二类、挽
歌ニ、御袖往觸之松矣云云、古今集、春上躬
恒歌ニ、ちるさくらはなのなかりせば
をゆくはるをたれかうらまん、など道

行摺とも、又ハ俗ニ行ごとさいふ、心也、觸の
字義ハ、説文ニ、抵也、五音集韻、古今韻會ニ
衝也、かどゝゝてゝゝとゝいふ、也、漢書、元
帝紀ニ、去礼義觸刑法、とあるハ、ツキアタル義
也、○倭訓栞、廿六类ニ、ふれわぐ、告令を
いふ也、ふれとハ、日本紀、及律の古本ニ、經の字
をよみたるハ、ふれとの反、也、科ふれお
ほせとよめる、俗ニ觸字を用るハ、穩ふ

くらべ狗字うるとなふとよめとしぐ漢書の
注ゐ行示也とうるたれば是なるべし
いつまでかり〻ハ令うなり〻とよめるの
略語ふくぐ流の義也誥戒と意同じ